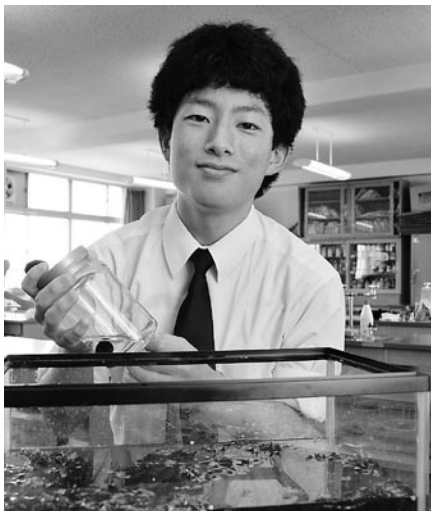
いきいき行田人

ヒメガムシの研究で青少年水大賞の特別賞を受賞

堀口 智博 さん（18歳・門井町）



「父が見つけたりもらったりしてきたカブトムシやクワガタなどを家で飼い、4歳くらいのころから自分で卵をふ化させたりしていました。おもちゃ代わりってところですかね」そう言って笑うのは、熊谷西高校3年生の堀口智博さん。物心ついたころから昆虫好きだった堀口さんは、あるときガムシという昆虫を見つけました。「小学3年生のときに家族で群馬県嬬恋村へ旅行に行った際、図鑑でしか見たことがなかったガムシを見つけ、すぐに採取して家に持ち帰りました。中学になると家の近くでもガムシ類を見つけられることに気付きましたが、多くの昆虫が活動を始める夏の暑い時期に限って出現しなかったので変な虫だなと気になっていました」このときの発見と疑問が、後に大きな功績をもたらすことになりました。

高校に入学し、担任の先生が自然科学部の顧問だったことから同部に誘われ入部した堀口さんは、早速ガムシについての研究を始めました。「行田グリーンアリーナの入り口付近にある水場に、ヒメガムシというガムシ類の一種が集まってくることを知り、高校1年の夏休みから週末になると観察や採取しに通いました。これまであまり研究されてこなかったヒメガムシについて、その生態や分布、食性などが徐々に分かってきました」そして、今年2月、先生から日本ストックホルム青少年水大賞へ応募してみないかと話をもらったそうです。「この研究は自分の興味で始めたもの。だから資料作成から研究発表まで自分ひとり。他校と比べグループの構成人数や研究レベルも違いすぎて、不安でつぶれそうになりました。しかし、〝ヒメガムシの生息が水田環境の生物多様性の指標となる〟との結論が水環境問題をテーマにしたこのコンテストの主旨とマッチしていたし、自分自身の手で作り上げたことが自信につながりました」と話し、全国15校17グループの応募の中で、審査部会特別賞を受賞しました。

ガムシを夢中で追いかけ大きな勲章を手にした少年は、「将来は研究者やネイチャーガイドなど自然や生物に関わりたい」との夢に向け、第一歩を踏み出したところです。

私の作品

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へご応募ください。

俳句

裏口の風心地よき昼寝かな　忍　丸山　連子

鰻の日込み合うの避け二人膳　城西　橋本まさ子

古代蓮現世の異音馴れ開く　佐間　根岸　克美

冷麦やもつれて踊る鍋のなか　谷郷　斉藤　勲

大昼寝彼の世の見えるあたりまで　南河原　三沢　一水

夏祭り老若男女輪に集ふ　桜町　大塚　保子

友を待つ日傘はくるりくるりかな　長野　内山　計江

利根川に生れし風や白日傘　須加　栗原かね代

向日葵や金婚過ぎて野良がすき　須加　藤野　治男

遠けれど初郭公や三声ほど　門井町　小暮　愛子

ひとしきり嫁の話や古茶新茶　清水町　新井　圭三

梅雨明けやフル回転の洗濯機　清水町　石川　裕美

空の下幾年飽かず草を引く　荒木　高沢よね子

蓮の葉に雨が残した真珠かな　城南　町田ツギ子

遠き日の夫の記憶や白絣　犬塚　細井喜美江

（木島　斗川　監修）

『ある夏の日』（俳画）
森　晴子（長野）